

## モントリオール留学記

McGill University

下出 孟史

(近畿大学大学院医学研究科  
分子生体制御学再生機能医学講座)

2019年7月より、カナダのケベック州モントリオールにある McGill 大学カルシウム研究室の David Goltzman 教授のもとに留学させて頂いております。モントリオールは、トロントに次ぐカナダ第2の都市で、北米のパリとも呼ばれる大変美しい街です。ケベック州の公用語はフランス語ですが、McGill 大学キャンパス内では、英語が公用語として採用されています。個人的には、拙い英語に加えて以心伝心方式を採用しており、北米、欧州、中東、アジアの多くの国からの研究者と共に、充実した研究生活を送っております。

私は副甲状腺ホルモン関連蛋白の骨形成作用における分子機序解明をテーマとして、研究に携わっております。Cre-loxP システムを用いた遺伝子改変マウスを用いた実験をしておりますが、ようやく目的のマウスが得られ始めたところで、COVID-19 による社会的隔離政策 (Social distancing) に直面しております。3月中旬より、図書館などの公共施設やショッピングモール、レストランなどは閉鎖されました。大学においても、実験動物の維持管理等の必要最小限の仕事以外は禁止され、多くのラボが一時閉鎖されるという悲劇に見舞われています。恐らく、同時期に北米、欧州へ留学されている先生方の多くは同様の経験をされているでしょうし、中には最前線でウイルスと戦っておられる先生方もおられることと存じます。限られた留学期間を失ってしまうという気持ちも少なからずありますが、このような世界的問題を海外で経験し、他国の研究者と議論し、日本との違いを肌で感じる事ができたことは大変貴重であると感じております。カナダでは、WHO によるパンデミック宣言が行われた後に、ようやく政府や大学の対応が本格的になりました。初動は遅かったのですが、その後の対応は極めて迅速であり、多くの教育機関において、インターネット回線を用い、リモートでの授業が迅速に開始されたことも印象的でした。また、私の所属する研究室でも、Web 上でのラボミーティングが開始されました。実験が制限される中、毎週ボスに経過を報告することは困難極まりないのですが、帰国後にも、こちらの研究者とコミュニケーションをとることのできる環境を整備できたことは非常にメリットであると感じております。2021年6月までの留学期間を予定しておりますが、一日も早く COVID-19 が終息し、平和な日々が戻ることを祈っております。

最後に、このような貴重な機会を与えて頂きました、近畿大学医学部の梶博史教授、濱田傑教授に深く御礼申し上げます。そして留学をご支援くださいました上原記念生命科学財団の皆様にも心より感謝申し上げます。